

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470300993		
法人名	(有)ヘルパーステーション よろこび		
事業所名	グループホーム ほたる		
所在地	三重県鈴鹿市		
自己評価作成日	平成 25年 10月 23日	評価結果市町提出日	平成26年2月19日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kihon=true&JigvosvoCd=2470300993-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 25 年 11 月 15 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

施設の行事は「ほたる通信」で、利用者の様子は「介護支援経過」で、施設の運営状況は「運営推進会議報告書」を、家族に郵送している。離れていても、利用者の事、施設の事がよく分かるように報告している。食事は1日3食、野菜を中心にし、お肉、魚とバランスのよい献立で、すべて手作りで提供している。利用者が楽しく、張りのある生活ができるよう努めている

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

にこやかな表情で手を振って出迎えてくれる利用者が印象的な当事業所は、皆が穏やかに暮らされている。調理の下拵えや、後片付け、洗濯物を畳む方の姿も見られ、それぞれが自分の役割を持ち意欲的に過ごされている。毎年、鈴鹿ベルシティで行われる同業者主催の作品展「おたっしや広場」への出展に向けて、年明けから5カ月程かけて大きさ180cmにもなる紙ビーズを皆で丸となって作っている。それを皆で見に行くのも、出来上がりを事業所へ飾ることも楽しみの一つである。又、事業所の畑で作った野菜を皆で収穫し、それを料理して食べる機会や、年間を通して様々な季節の行事(餅つき、鏡開き、節分、花火大会、七夕等)を楽しむ機会や、大正琴や踊りを見て楽しむ機会もある。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関から入った正面に掲げた理念は、目に入りやすい。「その人らしい生き方、共に歩き、共に生きる」の理念は分かりやすく職員もよく理解し、実践できるよう努力している。	日々の支援で理念を実践するために、より具体的な言葉(「声かけに注意する」等)で短期目標を決めその実践に努めている。そして、毎月のミーティングで短期目標をクリア出来たかどうか話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎日の散歩の際、地域の方と会えば挨拶交流し、畑では野菜の植え方など教えてもらっている。市民館の行事に参加し地域の方との交流に努めている。	公民館行事(音楽療法士の指導のもと歌を歌う、そば打ち体験等)、地域の伝統行事(寝釈迦祭り、楠鯨舟祭り等)、自治会の花火大会へ積極的に参加している。又、事業所の祭りには地域の方にも来てもらっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	一ノ宮幼稚園との交流では、利用者がお手玉、こま回し、縄跳びを披露し、市民館の行事のみんなで歌おう、そば打ち体験も参加。記憶障害はあるものの、いろんな出切る事がある事を理解し、偏見がなくなるよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催している運営推進会議では、防災、施設での取り組み、ターミナルケアなどのテーマで話し合った。助言いただいたことをサービスの向上につなげている。	包括職員より、熱中症対策として「かき氷」を利用してはどうかとの提案や、広域連合から在宅医療ケアシステムの利用案内の意見を頂く等、参加者より様々なアドバイスを受けサービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の報告書など、提出物を持参した際、おたっしや広場作品展で頑張った事をアピールしたり、ターミナルケアについて相談したりしている。	広域連合に、何かある事に質問をして協力してもらっている。最近、訪問看護についての質問をした。又、市主催の勉強会へ参加したり、介護相談員の受け入れをしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については、施設内研修を行い、職員はよく理解している。利用者の安全を考え、拘束が必要な場合は家族の同意書を得て拘束を行うこともあるが、期間を決めている。	玄関の施錠はせずに自由な暮らしを支援している。徘徊される方の場合は、なぜ徘徊をするのか理由とその人のパターンを職員全員で把握し、行動を抑制しないよう支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内研修で虐待について学んでいる。身体的虐待だけでなく、言葉による精神的虐待もよく理解し職員同士が注意しあい、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者親族で後見人の手続きされているのは1人。職員は研修で学んでいるので、必要がある家族があれば支援する。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、契約書及び重要事項説明書の各項目において詳しく説明し、理解・納得して頂いた後、契約を交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からは、普段の生活状況や会話等から思いを汲み取っている。家族からは面会やサービス計画書の説明時、年2回の家族会にて要望を伺っている。	年2回、家族会を開催しており、祭りを兼ねて開催する等、意見を言い易いよう雰囲気作りにも努めている。家族から、幼稚園児との交流や夏の塩分摂取についての提案をいただき実践につなげたこともある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の職員ミーティングは全員参加で施設運営について意見を聞き、検討した結果を施設運営に反映している。	月1回のミーティングでは、職員全員が遠慮なく意見を出し合っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は職員の力量や勤務態度などを十分理解しており、労働時間など職員の希望を聞き、働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の案内は掲示し、参加の声掛けをしている。施設内研修では利用者の心身状態や認知症の状態等、必要となるスキルに着目し、専門書やインターネットより取得・抜粋し学んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	三重県地域密着型サービス協議会に入会しており研修に参加することで同業者と交流でき、学んだ事を施設内研修する事でサービスの向上につなげている。また、年1回鈴鹿市の同業者でおたっしや広場作品展に参加し交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人とゆっくり向き合いいろんな話をしながら、本人の思いを伺う。言葉で上手く表現できない方は、家族から話を聞きながら、新しい生活に安心して馴染んで頂けるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とは、何に困って施設入所を考えられたか、施設入所に踏み切るにあたって家族の思いは複雑と思われる。そこで家族の要望をしっかり受け止め、安心して施設に入所して頂けるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所後、施設での生活で出来る事、出来ない事、何が好きかなど見極めながら、サービス計画を考えるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	畑の野菜づくりなどは、職員より利用者の方が詳しい。得意とする利用者には教えてもらいながら作業するが、今年の玉ねぎは大きくならず、らっきょうサイズで皆で大笑い、楽しい関係となっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の様子、施設での行事などこまめに報告し、家族は離れていても、どんな状態で何をしているか分かるようにしている。必要な事は連絡し相談して、本人にとって一番いい方法を考えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人が入所前に買い物に行っていたショッピングセンターに出かけ、馴染みの店員などと交流できるよう支援している。	馴染みのスーパーや洋服屋で買い物を希望する方や、入院中の家族の見舞いを希望する方を職員が車で送迎し、付き添い支援している。又、家族の支援で墓参りに行かれる方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者が孤立しないよう努めているが、トラブルになる事もでてくる。職員が、上手く納めスムーズな関係が持てるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	特養に変わられたりした場合は、お見舞いに行ったりしているが、その後は家族からの相談もほとんどない。もし、何か言ったら、できる事はさせてもらう。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	サービス計画更新時に、自分の思いを話せる利用者には希望を確認している。普段の会話の中からも汲み取る事はできる。会話が困難な利用者には表情や様子から気持ちよく暮らせるよう考えている。	それぞれの職員が、一人ひとりの思いの把握には努めているが、その把握した内容を皆で共有したり、確認し合う仕組みが整っていない。	利用者がその人らしく暮らし続ける支援に向けて、思いや意向を把握したものを記録し、職員皆で共有する仕組みを作り、それをケアの現場で活かされることに期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所の際に、家族にアセスメントシート記入をお願いし生活歴や馴染みの暮らしは把握している。入所後は本人との会話の中からも情報を得るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は毎日の生活の中で、利用者が1日をどんなふうにご過ごしたいか、今日の体調はどうか、精神的に落ち込んでいないかなど把握できる。有する力も変化していくのでミーティングなどで相談しながら役割の変更などしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回のミーティング時に、サービス計画書の内容が現状に即しているか、職員全員で話し合う。その結果、家族にも相談しながら計画書の作成を行っている。	毎月、職員全員で話し合い、モニタリングをしている。そこで出た意見等を参考に、現場の実務にも携わっている介護支援専門員が介護計画の見直しを3ヵ月毎に実施し、家族には直接説明して同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に日々の様子、混乱時の対応、治まった様子など詳しく記入している。情報を共有するために連絡ノートを活用している。ケアマネは日誌を確認し必要であればサービス計画の変更を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	高齢で遠方の妹がキーパーソンで通院介助ができない利用者の白内障手術付き添い、術後通院、点眼をすべて行った。また、家族それぞれの事情も把握しているので、無理のないよう、柔軟な支援、サービスを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	畑の野菜作りは隣の方に教えてもらったり、一宮幼稚園との交流で園児と遊んだり、市民館の行事、みんなで歌おうやそば打ち体験では、仲間に入れてもらい楽しんでいただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所の際、施設の協力医の説明はするが、かかりつけ医は本人と家族で決めてもらっている。症状によっては家族と相談して、病院を変えるなど適切な医療を受けられるよう支援している。	それぞれが馴染みのかかりつけ医に通院している。通院介助・送迎は原則家族であるが無理な場合は事業所が支援している。協力医は365日、24時間対応が可能なので必要に応じて利用している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の体調、様子の変化があれば相談し、助言をもらい、適切な医療につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院したとき、入院に必要な物を用意し、看護師に情報提供する。カンファレンスがあれば参加させていただき、安心して退院できるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に看取りはしない施設である事をつたえてあるが、嚥下が悪くなり、全身状態が悪化してきた場合、どこで、どういう風に過ごす事が、本人にとって一番なのか、家族と何度も話し合い納得できるよう支援している。	現在、看護師不在のため、医療行為の必要な方の受け入れや看取り支援はしていないが、今後365日、24時間対応可能な訪問看護と契約する予定であり、医療面・健康管理面等での事業所の対応力のレベルアップを図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は、消防署に出向き指導を受けているが、忘れてしまうので繰り返し訓練する必要があると考えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回火災訓練を行っている。地震津波に関しては、施設から近い5階建てマンションを避難場所をお願いしてあるので、散歩の際に歩く練習するよう心がけている。	年2回火災訓練を行っている。他、津波の被害から逃れるために近隣の5階建てマンションを避難場所とし移動する訓練を徐々に進めている。階段昇降等の援助も含め地域の方の協力も強化していく予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員の月間目標として、「利用者には優しく言葉がけする」として取り組んだ。	一人ひとりの誇りを尊重するために、不快感を与えないよう言葉かけに注意するように努めている。又、入浴・排泄時には羞恥心に気を配り、さりげなくタオルで隠す等して対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	行事やレクリエーションも強制参加でなく、自由に決めてもらっている。利用者が思いを口にされたときは、ゆっくり傾聴し、できるだけ希望にそえるよう対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設の1日の流れは決まっているが、その日の体調や気分で希望があれば、柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1度、出張理容に来て頂き、ヘアカットしてもらい、洋服も自分で選ぶなどしておしゃれができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は何かいいか何うと同じ答えが返ってくる。利用者の好みは把握して献立を考えている。野菜下ごしらえ、テーブル拭き、後片付けなど、職員と一緒にやっている。	野菜たっぷりの食事は、利用者が下拵えした野菜(じゃがいも、えんどうの皮むき等)を利用し、職員の手作りで家庭的な味である。職員も同じ献立を同じテーブルで食べ、後片付け(食器洗い等)も利用者と共に楽しく行っている。又、草餅やケーキ等のおやつ作りを楽しむ機会もある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1ヶ月に2回体重測定し、食べる量が適当か考える。献立は野菜の摂取を多めに、肉、魚とバランスよく考えている。水分量も、お茶を好んで飲まれない方は、ヤクルトや野菜ジュースで補い。夏場はスポーツ飲料も飲用してもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	1日3回口腔ケアを行っている。利用者の横に付き添い、綺麗にできているかチェックし、足りないところは職員が介助している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の記録から排泄パターンを読み取り、自らトイレに行かれない利用者は誘導している。なるべく失禁のないよう対応している。	殆どの方がトイレでの排泄をしており、夜も自分で行く方も多い。一人ひとりの排泄パターンを把握するために、排泄記録をしっかりと記入している。自分でトイレに行けても忘れがちな方には、タイミング良く声かけをして促す様にしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便表から便秘していないか確認する。便秘の利用者は内服薬を服用してもらっている。便の形状、回数で便秘薬が適当でないと思われる場合は主治医に相談し変更してもらっている。腹部マッサージ、ヤクルト飲用している利用者もいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	1人ひとりの希望やタイミングにあわせて入浴してもらってはいない。午後入浴と決まっている中での希望は伺える。職員との会話を楽しみながら、ゆっくり入浴を楽しんでもらっている。	個浴に週3回、一人ずつ入り、職員と1対1で会話を楽しみながら、せかさることなくゆっくりと寛げる時間となっている。又、ゆず湯を楽しむ機会もある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの利用者の体力、習慣で横になりたい時間は把握している。シーツも定期的に洗濯し清潔に気持ちよく眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が服薬内容を確認しやすいよう、カウンターの中にお薬内容のファイルを置いている。処方内容が変わるときは、連絡ノートに記載したり職員ミーティングで報告し、周知に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できる事を考え、無理のない役割を決めて張り合いを持てるよう考えている。行事やお出掛けを企画し、楽しみになるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	1人ひとり、その日の希望にそって戸外に出るのは、無理があり出来ないが、外出好きの利用者のために、外に出る機会が増えるよう努力している。	日頃から事業所の畑いじりや近隣への散歩は積極的に行っている。又、楠町の古民家へ行き昔の農具や玩具を見て楽しんだり、花見(桜・コスモス)や紅葉見学、楠鯨舟まつり、神戸の寝釈迦祭り等へ出かけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つ事を希望される3名の方が持っている。買い物でお金を使ったときは、家族に用途、残高を報告している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をしたいと言われた時は電話番号を押し、相手の方が出てから受話器を渡している。手紙は現在出したいといわれる方はみえないが、以前は封筒の宛名書き、投函の支援をしていた。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	気のあった利用者が話しやすいように、座席に配慮している。廊下に掲示してある1年間の行事写真を仲良く見る姿が、よくみられる。	窓から心地良い採光の入る居間には、菊の花が飾られ季節を感じられる。対面式の台所からは調理の音や匂いで家庭的な雰囲気や寛げる空間となっている。又、居間にある広い畳コーナーは、洗濯物を畳んだり寛ぐだけでなく、舞台としても活用できる利点がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の中では、独りになれる場所がないが、普段はホールで職員や利用者で賑やかに話したり、疲れたら自室で休んだり、思い思いに自由に過ごして頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所説明の際、居室に入る物であれば、何を持ってきてもらってもよいと伝えている。お位牌、遺影、ドレッサー、タンス、家族写真など持ち込み、居心地よく暮らせるよう工夫してもらっている。	趣味のCDをずらりと並べ枕元にラジカセがある部屋、家族の写真や絵画・壁掛けが飾られた部屋、お土産のぬいぐるみ、馴染みの筆筒が置かれている部屋等があり、それぞれが居心地良く暮らせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物はバリアフリーになっており、手すりも付け、転倒を防ぐよう考えられている。居室や利用者の行動範囲を整理し安全に自立した生活を送れるようにしている。		